

## V 排泄に関わる部位に作用する薬

### 1 痔の薬

#### 1) 痔の発症と対処、痔疾用薬の働き

痔は、肛門付近の血管が鬱血し、肛門に負担がかかることにより発症する肛門の病気の総称であり、その主な病態としては、痔核、裂肛、痔瘻がある。

痔核は、肛門に存在する細かい血管群が部分的に拡張し、肛門内にいぼ状の腫れが生じたもので、一般にいぼ痔と呼ばれる。便秘や長時間同じ姿勢でいる等、肛門部に過度の圧迫をかけることが、痔核を生じる主な原因とされている。肛門の直腸に近い側に生じた痔核を内痔核と呼ぶ。通常、痛みを感じることはなく、自覚症状が少ないことが特徴である。排便時に、肛門から成長した痔核がはみ出る脱肛や出血する症状が現れる。一方、肛門の出口側に生じた痔核を外痔核と呼ぶ。内痔核と異なり、排便と関係なく、出血や患部の痛みを生じる。

裂肛は、肛門の出口からやや内側の上皮に傷が生じる症状のことであり、一般に、切れ痔（又は裂け痔）と呼ばれる。裂肛は、便秘等により硬くなった便を排泄する際や下痢の便に含まれる多量の水分が肛門の粘膜に浸透し、炎症を起こしやすくなった状態で、勢いよく便が通過する際に粘膜が傷つけられることにより発生する。

痔瘻は、肛門内部に存在する肛門腺窩と呼ばれる小さなくぼみに便がたまり、炎症・化膿を生じることで起きる。体力低下等により抵抗力が弱まっているときに起こりやすい。炎症・化膿が進行すると、肛門周囲の皮膚部分から膿が溢れ、その膿により周辺部の皮膚がかぶれ、赤く腫れて激痛を生じる。

痔は、肛門部に過度の負担をかけることやストレス等により生じる生活習慣病である。長時間座るのを避け、軽い運動によって血行を良くすることで予防することができる。また、食物繊維を摂取し、便秘を予防することも痔の予防につながる。

一般用医薬品の痔疾用薬は、切れ痔（裂け痔）又はいぼ痔による痛み、腫れ、痒み、出血等の症状の緩和を図るものであり、医薬品の使用と併せて痔の原因となっている生活習慣の改善等が図られることが重要である。

#### 2) 代表的な配合成分等、主な副作用

一般用医薬品の痔疾用薬には、肛門患部に適用する外用薬と内服して使用する内用薬がある。

外用痔疾用薬は、痔の患部に直接作用する坐剤、軟膏剤（注入軟膏を含む。）又は外用液剤である。内用痔疾用薬は、腸で吸収された有効成分が循環血液中に入って全身的に作用するため、効果が現れるまでにある程度の時間を要する。

#### ● 外用痔疾用薬

外用痔疾用薬には、以下のような成分を組み合わせて配合されている。なお、外用薬であっても坐剤や注入軟膏の場合には、成分の一部が直腸で吸収されて循環血流中に入り、内服の場合と同

様の影響を生じる。そのため、配合成分によっては注意を要する場合がある。

(a) 局所麻酔成分

局所の痛み・<sup>かゆ</sup>痒みを和らげることを目的として、アミノ安息香酸エチル、塩酸ジブカイン、塩酸プロカイン、リドカイン等の局所麻酔成分が配合されている場合がある。

いずれも患部の知覚神経の伝導を遮断して、痛みや<sup>かゆ</sup>痒みの感覚を和らげるもので、中枢神経系への作用はない。局所麻酔成分は全身作用を目的としたものでないが、坐剤又は注入<sup>こう</sup>軟膏では、まれにショック（アナフィラキシー）のような全身性の重篤な副作用が現れることがある。

(b) 抗炎症成分

① ステロイド性抗炎症成分

<sup>こう</sup>肛門部の炎症や<sup>かゆ</sup>痒みを和らげる成分として、酢酸ヒドロコルチゾン、酢酸プレドニゾン等のステロイド性抗炎症成分が配合されている場合がある。

ステロイド性抗炎症成分に関する出題については、X-2（<sup>かゆ</sup>痒み、<sup>は</sup>腫れ、痛みを抑える配合成分）を参照して作成のこと。

ステロイド性抗炎症成分は、長期間に渡って連用すると患部の免疫機能が低下し、感染症や患部の<sup>のう</sup>化膿等を引き起こすおそれがある。患部が<sup>のう</sup>化膿している人では使用を避ける必要がある。

② グリチルレチン酸

比較的緩和な抗炎症作用を有する成分として、グリチルレチン酸が配合されていることがある。グリチルレチン酸は、体内で分解されてグリチルリチン酸となって作用する。グリチルレチン酸が配合された坐剤、注入軟膏における留意点に関する出題については、I-1（かぜ薬）を参照して作成のこと。

③ 塩化リゾチーム

塩化リゾチームは、粘膜を保護し、炎症を抑制するとともに、結合組織の代謝を促進し、炎症を生じた組織の修復に寄与する。塩化リゾチームが配合された坐剤、注入軟膏における留意点に関する出題については、I-1（かぜ薬）を参照して作成のこと。

(c) <sup>よう</sup>鎮痒成分

① 抗ヒスタミン成分

<sup>じ</sup>痒に伴う<sup>かゆ</sup>痒みを抑える成分として、塩酸ジフェンヒドラミン、ジフェンヒドラミン、マレイン酸クロルフェニラミン等の抗ヒスタミン成分が配合されている場合がある。外用で用いられる抗ヒスタミン成分に関する出題については、X-2（<sup>かゆ</sup>痒み、<sup>は</sup>腫れ、痛みを抑える配合成分）を参照して作成のこと。

塩酸ジフェンヒドラミン又はジフェンヒドラミンが配合された坐剤、注入軟膏における留意点に関する出題については、VII（アレルギー用薬）を参照して作成のこと。

② 局所刺激成分

局所刺激作用によって患部の痒みを抑える成分として、熱感を生じさせるクロタミトン、冷感を生じさせるカンフル、ハッカ油、メントール等が配合されている場合がある。

(d) 止血成分

① アドレナリン作動成分

患部の血管を収縮させて出血を抑えることを目的として、塩酸テトラヒドロゾリン、塩酸メチルエフェドリン、塩酸エフェドリン、塩酸フェニレフリン、塩酸ナファゾリン等のアドレナリン作動成分が配合されていることがある。アドレナリン作動成分に関する出題については、Ⅷ（鼻に用いる薬）を参照して作成のこと。

塩酸メチルエフェドリンが配合された坐剤、注入軟膏における留意点に関する出題については、Ⅱ－１（咳止め・痰を出しやすくする薬）参照して作成のこと。

② 収斂保護止血成分

粘膜表面に不溶性の膜を形成することで、粘膜を保護して止血する作用がある成分として、酸化亜鉛、タンニン酸などが配合されている場合がある。

タンニン酸については、ロートエキス・タンニン坐剤や複方ロートエキス・タンニン軟膏のように、鎮痛鎮痙作用のある成分であるロートエキスと組み合わせて用いられることもある。ロートエキスが配合された坐剤、注入軟膏における留意点に関する出題については、Ⅲ－３（胃腸鎮痛鎮痙薬）を参照して作成のこと。

③ 硫酸アルミニウムカリウム

局所的に粘膜を保護して止血する成分として、硫酸アルミニウムカリウム、卵黄油等が配合されることがある。

(e) 殺菌消毒成分

殺菌作用により細菌の感染を防ぐ成分として、塩酸クロルヘキシジン、イソプロピルメチルフェノール、塩化セチルピリジニウム、塩化ベンザルコニウム、塩化デカリニウム等が配合されている場合がある。これら殺菌消毒成分に関する出題については、Ⅹ（皮膚に用いる薬）を参照して作成のこと。

(f) 創傷治療促進成分

アラントイン及びそのアルミニウム塩であるアルミニウム・クロルヒドロキシアラントイネートには、肉芽形成作用、壊死組織除去作用があり、組織修復や肛門部の創傷の治療を目的として、外用痔疾用薬に配合されている場合がある。

(g) 生薬成分

① シコン

ムラサキ科に属するムラサキの根を用いた生薬で、新陳代謝促進作用、殺菌作用、消炎作用があるとされている。

## ② セイヨウトチノキ種子

トチノキ科のセイヨウトチノキの種子を用いた生薬で、血液循環を改善し、抗炎症作用がある。

## (h) その他：ビタミン成分

肛門周囲の末梢血管の血行を改善し、患部の鬱血の改善を促す成分として酢酸トコフェロール（ビタミンE酢酸エステル）、傷の治りを促す成分としてビタミンA油等が配合されている場合がある。

## ● 内用痔疾用薬

内用痔疾用薬は、生薬成分を中心として、以下のような成分を組み合わせて配合されている。

## (a) 生薬成分

生薬成分として、センナ（又はセンノシド）、ダイオウ、カンゾウ、トウキ、オウゴン、サイコ、ポタンピ、セイヨウトチノミ等が配合されている場合がある。

センナ（又はセンノシド）、ダイオウが配合された医薬品に共通する留意事項に関する出題については、Ⅲ－2（腸の薬）を参照して作成のこと。

カンゾウが配合された医薬品に共通する留意事項に関する出題については、Ⅱ－1（咳止め・痰を出しやすくする薬）参照して作成のこと。

トウキに関する出題については、XⅢ（滋養強壮保健薬）を参照して作成のこと。

## ① オウゴン

オウゴンは、シソ科のコガネバナの根を用いた生薬であり、消炎、解熱作用を示す。

## ② サイコ

セリ科のミシマサイコ又はその変種の根を用いた生薬で、中枢抑制作用、鎮痛、抗炎症等多様な薬理を持つことが知られ、精神神経用薬、痔疾用薬、滋養強壮保健薬等に配合される。

## ③ ポタンピ

ポタン科のポタンの根皮を用いた生薬で、鎮静、鎮痛作用を目的として用いられる。

## ④ セイヨウトチノミ

トチノキ科のセイヨウトチノキ（別名マロニエ）の種子を用いた生薬で、腫れ、炎症を抑える作用があるとされる。

## (b) 抗炎症成分

塩化リゾチーム、ブロメラインのような消炎作用を有する成分が配合されている場合がある。これら成分に関する出題については、Ⅰ－1（かぜ薬）を参照して作成のこと。

## (c) 止血成分

毛細血管を強化し出血を抑える成分として、カルバゾクロムが配合されていることがある。

## (d) その他：ビタミン成分

肛門周囲の末梢血管の血行を促して、鬱血を改善する成分として、酢酸トコフェロール、コハク酸トコフェロール等が配合されることがある。

## ● 漢方処方製剤

乙字湯、芎歸膠艾湯のいずれも、構成生薬としてカンゾウを含む。カンゾウを含む医薬品に共通する留意点に関する出題については、Ⅱ－１（咳止め・痰を出しやすくする薬）を参照して作成のこと。

また、切れ痔（、便秘）に用いられる場合の乙字湯を除き、いずれも比較的長期間（１ヶ月位）服用されることがあり、その場合に共通する留意点に関する出題については、XⅣ－１（漢方処方製剤）を参照して問題作成のこと。

## (a) 乙字湯

大便が硬くて便秘傾向がある人における、痔核（いぼ痔）、切れ痔、便秘の症状に適すとされているが、体の虚弱な人（体力の衰えている人、体の弱い人）、胃腸が弱く下痢しやすい人では、悪心・嘔吐、激しい腹痛を伴う下痢等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。

まれに重篤な副作用として、肝機能障害、間質性肺炎を生じることが知られている。

通常、構成生薬としてダイオウを含んでおり、注意すべき副作用等に関する出題については、Ⅲ－２（腸の薬）を参照して作成のこと。その場合、他の瀉下剤との併用を避ける必要がある。

## (b) 芎歸膠艾湯

痔出血の症状に適すとされているが、胃腸が弱く下痢しやすい人では、胃部不快感、腹痛等の副作用が現れやすい等、不向きとされる。

## 3) 相互作用、受診勧奨

【相互作用】 外用痔疾薬のうち坐剤、注入軟膏については、成分の一部が直腸で吸収されて循環血流中に入り、内服の場合と同様の影響を生じる。そのため、痔疾用薬の成分と同種の作用を有する成分を含む内服薬や医薬部外品、食品等が併用されると、効き目が強すぎたり、副作用が現れやすくなることがある。

内用痔疾用薬では生薬成分を主体とした製剤や漢方処方製剤が中心となるが、生薬製剤又は漢方処方製剤を使用する際に留意されるべき相互作用に関する一般的な事項について、XⅣ（漢方処方製剤・生薬製剤）を参照して問題作成のこと。

【受診勧奨】 一般の生活者においては、痔はその発症部位から恥ずかしい病気として認識されていることが多く、不確かな情報に基づく誤った処置がなされたり、放置して症状を悪化させ

てしまうことがある。

肛門部にはもともと多くの細菌が存在しているが、肛門の括約筋によって細菌の侵入を防ぎ、血流量も豊富なため、通常、感染症を生じることはない。しかし、痔の悪化等により細菌感染が起きると、異なる種類の細菌の混合感染によって起こり、膿瘍や痔瘻を生じて周囲の組織に重大なダメージをもたらすことがある。これらの治療には手術を要することもあり、すみやかに医療機関を受診し、専門医の診療を受ける必要がある。

痔の原因となる生活習慣の改善を図るとともに、一定期間、痔疾用薬を使用してもなお、排便時の出血、痛み、肛門周囲の痒み等の症状が続く場合には、肛門癌などの重大な病気の症状である可能性も考えられ、早期に医療機関を受診して専門医の診療を受けることが望ましい。

## 2 その他の泌尿器用薬

### 1) 代表的な配合成分等、主な副作用

残尿感、尿量減少等の症状の改善を目的とする生薬成分として、以下のようなものがある。いずれも小児への適応はなく、また、摂取した成分の一部が乳汁に移行することが知られている。

#### (a) ウワウルシ

ツツジ科のクマコケモモの葉を用いた生薬で、尿路消毒の効果を示す。

#### (b) カゴソウ

シソ科のウツボグサの花穂を用いた生薬で、消炎、利尿作用を示す。

カゴソウのみを長期間連用すると胃を刺激するため、胃が弱い人が服用する際には注意が必要である。

#### (c) キササゲ

ノウゼンカズラ科のキササゲの果実を用いた生薬で、利尿作用を示す。一度に大量に服用すると、気分が悪くなるなどの副作用を示す。体を壊している人、妊婦は使用前に医師又は薬剤師に相談することとなっている。

#### (d) サンキライ

ユリ科のケナシサルトリイバラの根茎を用いた生薬で、利尿、解毒作用を示す。

#### (e) ソウハクヒ

クワ科のマグワの根皮を用いた生薬で、利尿、消炎作用を示す。

#### (f) モクツウ

アケビ科のモクツウの木質茎を用いた生薬で、利尿作用、消炎作用を示す。

### ● 漢方処方製剤

いずれも比較的長期間（1ヶ月位）使用されることがあり、その場合の留意点に関する出題に

<sup>i</sup> 肛門周囲に接している皮膚細胞又は肛門と直腸の境の粘膜上皮細胞が腫瘍化したもの